

米軍偵察写真から読み取る知覧飛行場施設の配置状況

八巻 聡

はじめに

『知覧町郷土史』¹⁾に知覧飛行場地図²⁾が掲載されているが飛行場の施設についての記述はほとんどみられない。これまで知覧特攻平和会館（以下、当館）では当時の飛行場関係者からの聞き取り調査を進め、判明した飛行場施設について館内の展示や知覧特攻慰霊顕彰会発行の『魂魄の記録』³⁾でその成果を公表してきた。

当館は、2007年に米国国立公文書館（以下、NARA）で保管されている知覧飛行場の偵察写真（写真番号5M343 1945年7月撮影）を（財）日本地図センター経由で入手した。この偵察写真は米軍が撮影したもので、飛行場の大部が撮影範囲に収まり、撮影縮尺が大きいものであった。戦時中の知覧飛行場の詳細を知ることのできる写真であったのでこれを聞き取り調査、現地での遺構調査に活用し飛行場施設の把握を進めた。

しかし、偵察写真に関わる米軍側の情報の使用例や複数の偵察写真を比較しての考察までは至っていなかった。

空襲・戦災を記録する会全国連絡会議が中心となって米軍資料の分析が進められ研究が深化してくると工藤 洋三氏から『米軍の写真偵察と日本空襲』⁴⁾や『沖縄を基地にした第28写真偵察戦隊の作戦』⁵⁾と米軍の偵察をテーマにした報告もされるようになった。

このような先行研究により偵察任務の全般が明らかになったこともあり、米軍側の資料から知覧飛行場への偵察について調査を行いやすい環境が整った。

当館が2018年度から取り組んでいるNARAでの資料調査収集事業において、知

覧飛行場の偵察写真を用いた報告書を入手した。米軍が撮影した偵察写真の分析が可能となったことから、知覧飛行場に対する偵察任務についてまとめることができ、飛行場施設の変遷も考察できるようになった。本稿は偵察写真（5M343）によって判明した飛行場施設の詳細を報告し、米軍が撮影した偵察写真は戦時中の飛行場施設の状況を検証できる有益な資料であることの一例を示すものである。

1. 目的と方法

本稿では、これまで聞き取り調査で得た情報に米軍側の資料、特に偵察写真の情報を加えて考察することによって知覧飛行場の歴史の一部を埋めようと試みるものである。

NARAで収集した米陸軍省参謀及び専門幕僚本部記録群⁶⁾や米空軍参謀本部記録群⁷⁾の中の『MIPI⁸⁾』に知覧飛行場への偵察任務によって得られた写真を使用しているものがあつた。

そこでまず、知覧飛行場への偵察任務の実施状況の集約を行った。次に、米軍は撮影した偵察写真をどのように分析して使っていたのか実例をあげて紹介する。偵察写真（5M343）撮影時の作戦における担当部隊や撮影方法などを検証し、写真から判読した施設と当時飛行場に勤務した方への聞き取り調査で判明した情報を写真に反映させて地区ごとにまとめた。

最後に、撮影時期の異なる同一場所の写真を比較し、施設の増設や空襲被害の推移を考察し、知覧飛行場に設けられた飛行機用掩体の分類と設けられた地区、その基数の集約を

行った。

2. 知覧飛行場への偵察任務

知覧飛行場への偵察任務について、『JAPANESE AIRFIELDS』⁹⁾、『MIPI』⁸⁾、『沖縄を基地にした第28写真偵察戦隊の作戦』⁵⁾から情報を抽出して一覧にまとめた(表1)。

知覧に初めて偵察機が飛来したのは1944年12月26日である¹⁰⁾。この時の偵察写真は雲がかかり、偵察写真としての質は高いものではなかったが、滑走帯の向きと延長、施設の規模、

掩体の数や配置などが判読されている。

3月25日にはマリアナ諸島のサイパン島に本拠地を置いた第3写真偵察戦隊が飛来した。偵察機はB-29を改造したF-13を使用。胴体の底部、側面に撮影用の窓が設けられ、真下及び斜方が撮影できるようになっていた¹¹⁾。

沖縄に飛行場を確保した後は、読谷飛行場を本拠地とする第7航空軍の第28写真偵察戦隊が偵察任務を行い、空襲の戦果判定、九州上陸作戦に向けた情報収集を行った。

表1 知覧飛行場への偵察任務

日付	軍	偵察部隊	偵察機	作戦番号	空襲との関連
1944年 12月26日	陸軍	第20空軍 第20爆撃集団 第444爆撃群団		4MR50	
1945年 1月1日	陸軍			5MF2	
3月18日	海軍	第58.1任務群 空母ホーネット	F6F	CV12-633	空襲あり (F6F)
3月25日	陸軍	第3写真偵察戦隊	F-13	3PR 5M100	
3月29日	海軍	第58.4任務群 空母ヨークタウン	TBM	CV11-225 CV10-348	空襲あり (TBM、F6F、SB2C、F4U)
5月4日	陸軍	第3写真偵察戦隊	F-13	3PR 5M187	
5月5日	陸軍	第314爆撃航空団第19群団	B-29	21BC 5MA148	空襲あり (B-29)
5月28日	陸軍	第3写真偵察戦隊	F-13	3PR 5M244	
6月7日	陸軍	第28写真偵察戦隊	F-5	(28PR) 5MA-123	
6月12日	陸軍	第28写真偵察戦隊	F-5	(28PR) 5MA-148	
6月20日	陸軍	第28写真偵察戦隊	F-5	28PR 5MA182	空襲あり (F4U)
7月1日	陸軍	第28写真偵察戦隊	F-5	(28PR) 5M240	空襲あり (B-25、F4U)
7月3日	陸軍	第28写真偵察戦隊	F-5	28PR 5MA244-1 (28PR) 5M251	空襲あり (B-25、F4U)
7月27日	陸軍	第28写真偵察戦隊	F-5	28PR 5M343	
7月31日	陸軍	第28写真偵察戦隊	F-5	(28PR) 5M383	
8月6日	陸軍	第28写真偵察戦隊	F-5	(28PR) 5M400 (28PR) 5M401	
8月10日	陸軍	第28写真偵察戦隊	F-5	(28PR) 5M436	
8月12日	陸軍	第28写真偵察戦隊	F-5	(28PR) 5M453	空襲あり (B-25、A-26)
8月14日	陸軍	第28写真偵察戦隊	F-5	(28PR) 5M464	

3. 偵察写真の使用例

米軍は偵察任務で撮影した写真をどのように使用したのか。

米陸軍省参謀及び専門幕僚本部記録群の中にある『AIRFIELDS IN THE JAPANESE EMPIRE』には日本全国の飛行場情報が写真付きでまとめられている。知覧飛行場についての頁では位置情報と共に、1944年12月26日に撮影された写真が使われ、そこには滑走路の長さ、飛行場施設地区の位置が記されている(図1)。

また、太平洋艦隊司令部がまとめた『JAPANESE AIRFIELDS』⁹⁾には全国の飛行場がリスト化され、位置情報、滑走路の長さや施設の情報と共に、偵察任務を行った作戦番号、撮影した写真によって把握した機数が記載されている。知覧飛行場についての記載を表2に整理した。

飛行場に駐機してある機を数え、機種が判明したものはその機種と機数を、判明できなかったものは単発機か双発機かで分類している。表からは、特攻作戦が行われる前の3月18日は囷を含めても27機と少ないが、特攻隊が知覧に進出してきた後の3月29日には急激に機数が増えたことがわかり、飛行場の慌ただしさが伝わってくる。

知覧からの特攻出撃は6月11日まで行われるが、特攻作戦中は70機以上、多い時は100機以上もの飛行機が知覧飛行場に集結していたことになる。

偵察によって把握した機種及び機数は必ずしも正確ではないと考えられるが、大きな動向を読み取る事ができる。

米空軍参謀本部記録群の『MIPI』においても偵察で撮影した写真が使われている。

米軍の使用例を次ページより紹介する。

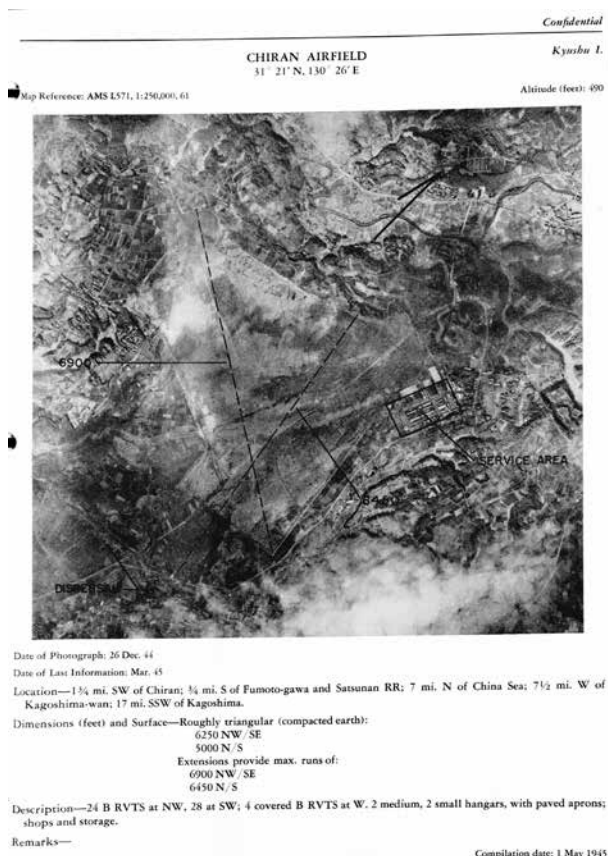


図1 AIRFIELDS IN THE JAPANESE EMPIRE

表2 知覧飛行場への写真偵察

日付	作戦番号	機数
1944年 12月26日	4MR50	単発機16機 双発機1機
1945年 1月1日	5MF2	単発機5機
3月18日	CV12-633	双発機2機 単発機16機 単発機(囷)9機
3月29日	CV11-225 CV10-348	双発機2機 単発機(不確実)76機
5月4日	3PR 5M187	97重爆1機 99軽爆2機 双発機(不確実)2機 4式戦40機 単発機(不確実)17機 単発機(囷)14機
5月28日	3PR 5M244	2式複戦1機 97重爆1機 3式戦18機 練習機16機 単発機(不確実)102機
6月20日	28PR 5MA182	4式戦67機 5式戦8機 99式襲3機 単発機(不確実)1機
7月3日	28PR 5MA244-1	単発機(不確実)108機

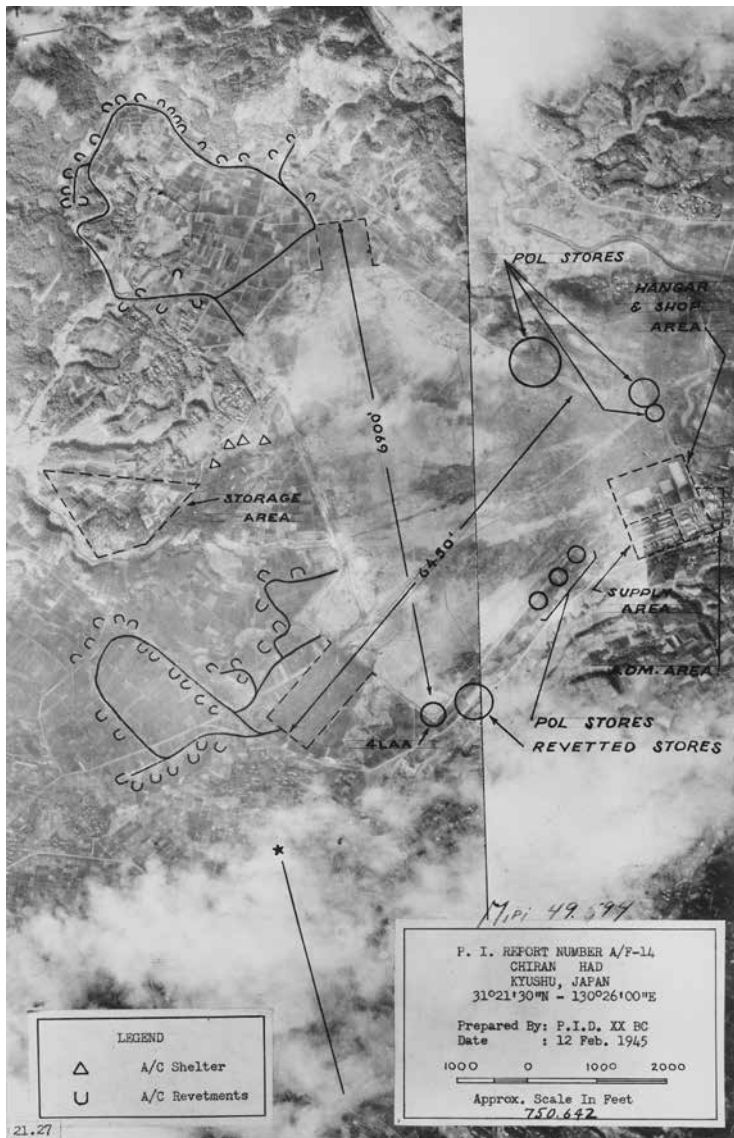


写真1 (MIPI-49594)

作戦番号4MR50により、1944年12月26日、第444爆撃群団が24インチカメラで飛行場直上から撮影した写真に判読した情報を記入している。

第20爆撃集団の写真情報資料 (MIPI-49594) によると、写真から滑走道を南北6900ft (約2100m)、北東/南西6450ft (約1970m)、飛行場の北西に無蓋型掩体24基、西に有蓋型掩体4基、南西に無蓋型掩体28基と分析している。

なお、資料に記載されている方位は印刷した写真の上方を北としているので実際の方位とは異なっている。

飛行場施設地区をHANGAR & SHOP AREA (格納庫、工場エリア) 及び SUPPLY AREA (供給エリア)、三角兵舎地区をSTORAGE AREA (貯蔵エリア) と分析している。

資料の備考欄には写真の質は低く、広い範囲が雲に覆われ不明瞭と記されている。

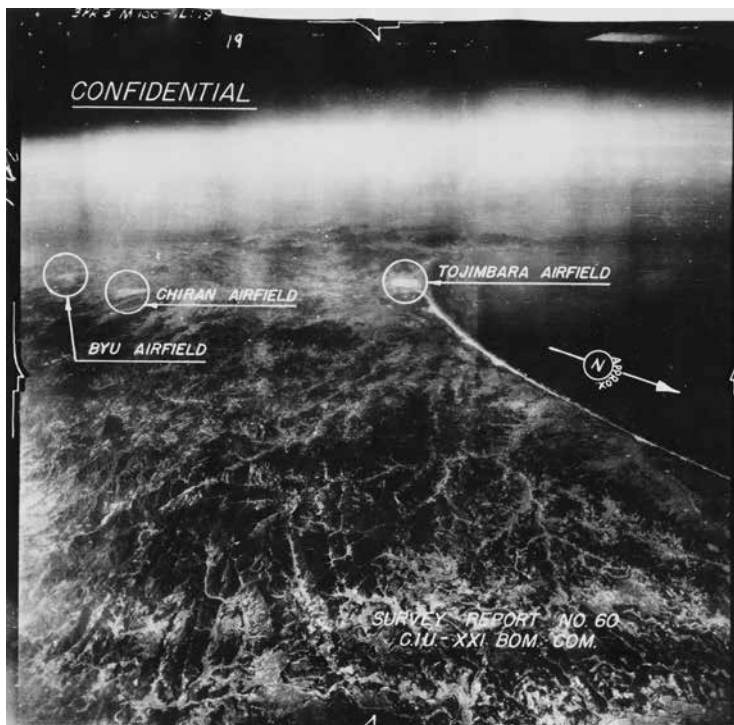


写真2 (MIPI-55476)

作戦番号3PR 5M100により、1945年3月25日に撮影された薩摩半島南部。

写真右が東シナ海と白く伸びる海岸線が吹上浜。TOJIMBARA AIRFIELD (万世飛行場)、CHIRAN AIRFIELD (知覧飛行場)、BYU AIRFIELD (青戸飛行場) と3箇所の陸軍飛行場が斜方から撮影されている。

この日の標的は九州南部及び西部とされ、鹿屋飛行場、出水飛行場、大刀洗飛行場、宇佐飛行場、佐伯飛行場と九州の広範囲を撮影している。



写真3 (MIPI-65270)

1945年3月29日に撮影された知覧飛行場。

北東上空より南西を向いて飛行場全体を写真に収めている。

白色の平坦な土地が飛行場用地である。上方に延びる湾曲した黒い線が誘導路、下方に整然と建ち並んでいる建物が飛行場の施設群である。

欄外右下に記載されている90.38-2501は所在地を示しており、90は日本の国別コード、38は地域コード、2501は知覧飛行場の目標番号を意味している。

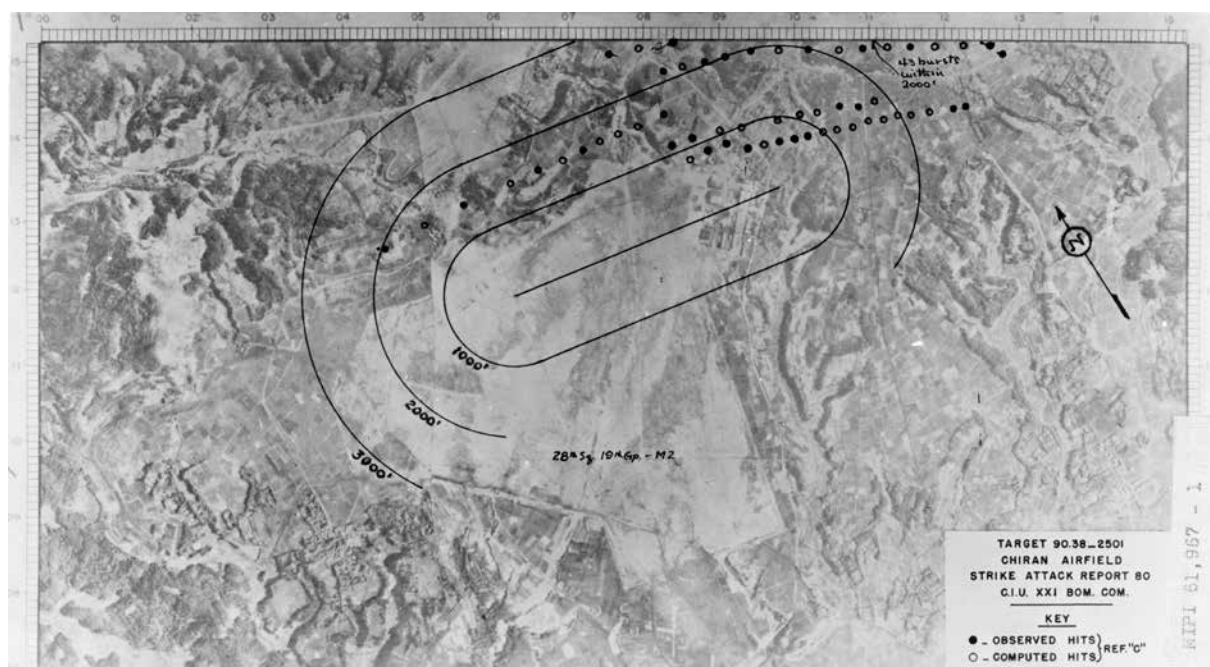


写真4 (MIPI-61967 写真の撮影日は不明だが5月5日の戦果判定に使用されている)

1945年5月5日、知覧飛行場はグアム島から飛来したB-29、8機の爆撃を受け500ポンド爆弾を118発投下された¹²⁾。写真はその戦果判定に用いられたもので●は爆発が確認された場所を示している。

飛行場の施設群を狙ったが、爆撃は北側にずれたことがわかる。

4. 5M343で撮影された偵察写真の考察

当館では、2007年にNARA所蔵の空中写真（7AAF 28PR 5M343）を（財）日本地図センター経由で入手した。

写真番号の7AAFは第7航空軍、28PRは第28写真偵察戦隊、5は撮影年（1945年）、M343は作戦番号を表している。

第28写真偵察戦隊は、P-38を改造したF-5を偵察機として使用し、沖縄の読谷飛行場を本拠地にし、伊江島に分遣隊を置いた。

添付された米軍標定図¹³⁾の撮影日は1945年7月22日（※後述する作戦任務最終報告書では7月27日）、撮影高度20000ft（6000m）、画質はEXCELENT（最高画質）と評価されている。飛行ルートは東シナ海から薩摩半島に進入して万世飛行場を撮影、その後南東に進み知覧飛行場、青戸飛行場、山川、指宿を撮影した。その後、鹿児島湾北岸にある海軍の第一国分基地まで北上してから東に進路を取り、大隅半島をなぞるように南下したルートが記されている。

第28写真偵察戦隊の全作戦に関する資料に「FINAL MISSION REPORT」（作戦任務最終報告書以下、最終報告書）がある。

5M343の最終報告書では撮影日7月27日、目標は九州の各飛行場、9時55分に離陸し目標到達時刻は12時～13時15分、撮影高度20000ft（6000m）、14時50分に着陸とある（図2）。

撮影機材としてK-18カメラ（焦点距離24インチ）、K-17カメラ（焦点距離6インチ）を使用し、TOJIMBARA（万世飛行場）、CHIRAN（知覧飛行場）、BYU（青戸飛行場）をはじめ九州中南部の飛行場14個所の撮影に成功している。

画質はEXCELENT（最高画質）と評価されるだけあり、飛行場の様子が詳細に判読できる写真となっている。



写真5 F-5写真偵察機（工藤 洋三氏提供）

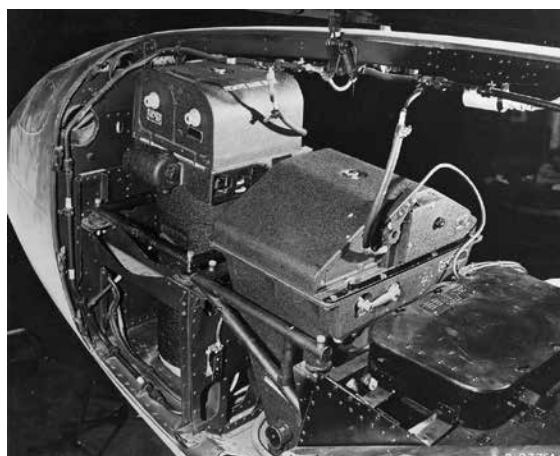


写真6 F-5機首（前方K-17、中央K-18）
（工藤 洋三氏提供）

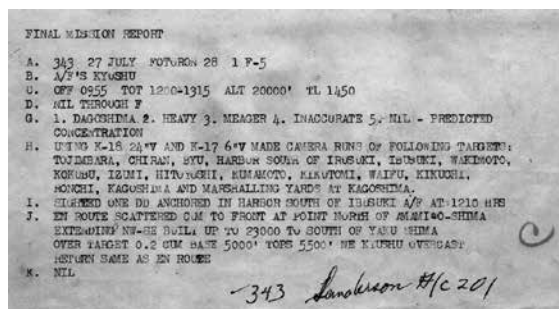


図2 作戦任務最終報告書（工藤 洋三氏提供）

- A. 作戦任務番号、作戦の日付、出撃機種と機数
- B. 指定された目標
- C. 離陸時刻、目標到達時刻、撮影高度
着陸時刻、作戦経過時間
- D. 損失機数
- E. 敵機の邀撃
- F. 戦闘クレジット
- G. 対空砲火
- H. 作戦の詳細
- I. 目撃
- J. 天候
- K. 注記

（出典：工藤 洋三『沖縄を基地にした第28写真偵察戦隊の作戦』）

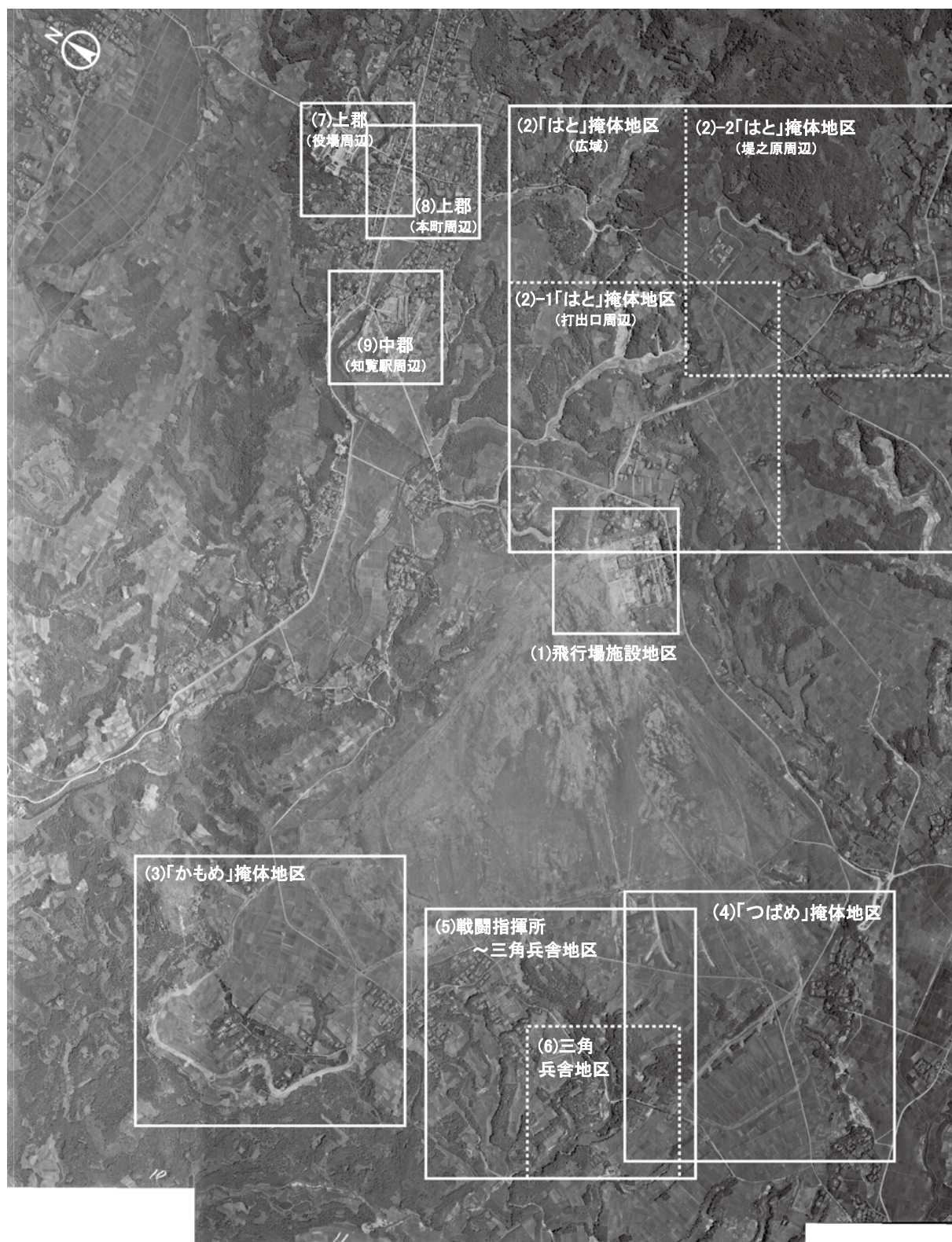


写真7 5M343によって撮影された1945年7月27日の知覧飛行場

F-5写真偵察機は飛行場の真上を西から東方に飛行。次に撮影する写真と7割ほど重なるようにしながら連続して撮影を行っている。写真7は6枚の写真を接合している。

飛行場施設を紹介するため、便宜的に11の地区を設定し、写真7でその範囲を白線で囲んだ。

次ページ以降で拡大したものを示す。

(1) 飛行場施設地区



施設の名称を調べるにあたり、飛行場に勤務した元軍人、元職員の親睦団体「知の飛南空会」にご協力をいただいた。

事務局をされていた御園益雄氏には2003年より現地の案内、会員を集めて施設配置の確認、会員から得た情報の提供を頂いた。この調査により施設の多くを判明させることができた。

飛行学校時代の施設名称¹⁴⁾

- | | | | |
|--------------------|-------------------------|-----------------|----------|
| ①正門 | ⑬付属家
(気象室、用務室
便所) | ⑳用途不明 | ㉑格納庫(木造) |
| ②守衛室 | ⑭洗濯場 | ㉒用途不明 | ㉒整備班事務所 |
| ③倉庫 | ⑮兵舎 | ㉓下士官集会所
送信室 | ㉓格納庫(鉄骨) |
| ④下士官食堂
酒保 | ⑯用途不明 | ㉔落下傘講堂 | ㉔格納庫(木造) |
| ⑤炊事場
炊事場事務所 | ⑰兵舎 | ㉕整備班休憩所 | ㉕着陸訓練施設 |
| ⑥浴場 | ⑱防火水槽 | ㉖ドラム缶置き場
給油所 | ㉖着陸訓練施設 |
| ⑦給水塔 | ⑲通信室 | ㉗用途不明 | ㉗気象観測所 |
| ⑧用途不明 | ⑳庭球コート | ㉘弾薬庫 | ㉘防火水槽 |
| ⑨雇用人休憩所 | ㉑自動車班事務所 | ㉙弾薬庫 | ㉙用途不明 |
| ⑩縫製工場 | ㉒車庫 | ㉚油脂庫 | ㉚航空本部 |
| ⑪洗濯物干場 | ㉓車庫 | ㉛燃料置き場 | ㉛知覧詰所 |
| ⑫庁舎(事務室、
講堂、兵舎) | ㉔防火水槽 | ㉜用途不明 | ㉜羅針盤修正場 |
| | ㉕休憩所 | ㉝格納庫(木造) | |

(2)「はと」掩体地区（広域）



飛行場の周囲には飛行機を分散させ、空襲での被害を抑えるために誘導路と掩体が造られた。知覧飛行場には大きく分けて3地区あり、それぞれ「かもめ」「つばめ」「はと」¹⁵⁾と名称がつけられていた。

飛行場東の「はと」掩体地区は格納庫などがあった飛行場施設地区から東方に誘導路が延び、その両脇に飛行機が置かれた。

この地区では飛行機を守るための掩体は設けられておらず、誘導路の脇に飛行機を駐機させているだけであった。

弁天山の麓には木製の有蓋掩体が2箇所造られた。

飛行場と弁天山のほぼ中央に中世後期に築かれた知覧城跡がある。シラス台地を利用した深い空堀が特徴でその地形を利用して壕が掘られ、大刀洗陸軍航空廠 知覧分廠の本部、整備工場が置かれていた¹⁶⁾。

次頁で「はと」掩体地区の打出口周辺、堤之原周辺を紹介する。

(2)－1「はと」掩体地区（打出口周辺）



飛行場施設地区から東方に延びる誘導路の両脇には機首を内側に向けた機影が確認できる。機影を確認した場所を○で示した。

場所によっては家と家の間にも飛行機を駐機させている。

誘導路は弁天山の麓まで伸びているが途中、永里方面にも分岐している。こちらは直線的な誘導路に駐機させており、機影の周囲には土が盛られ植樹されたような影を見ることができる。

知覧城跡の周囲が他所に比べて白く写っている。これはシラス台地を掘削して知覧分廠

の施設を造る際、排土をその周囲に処置したためと推測できる。知覧城跡本丸の地下に大規模な整備工場¹⁶⁾が造られていたため特にその周囲が白くなっている。

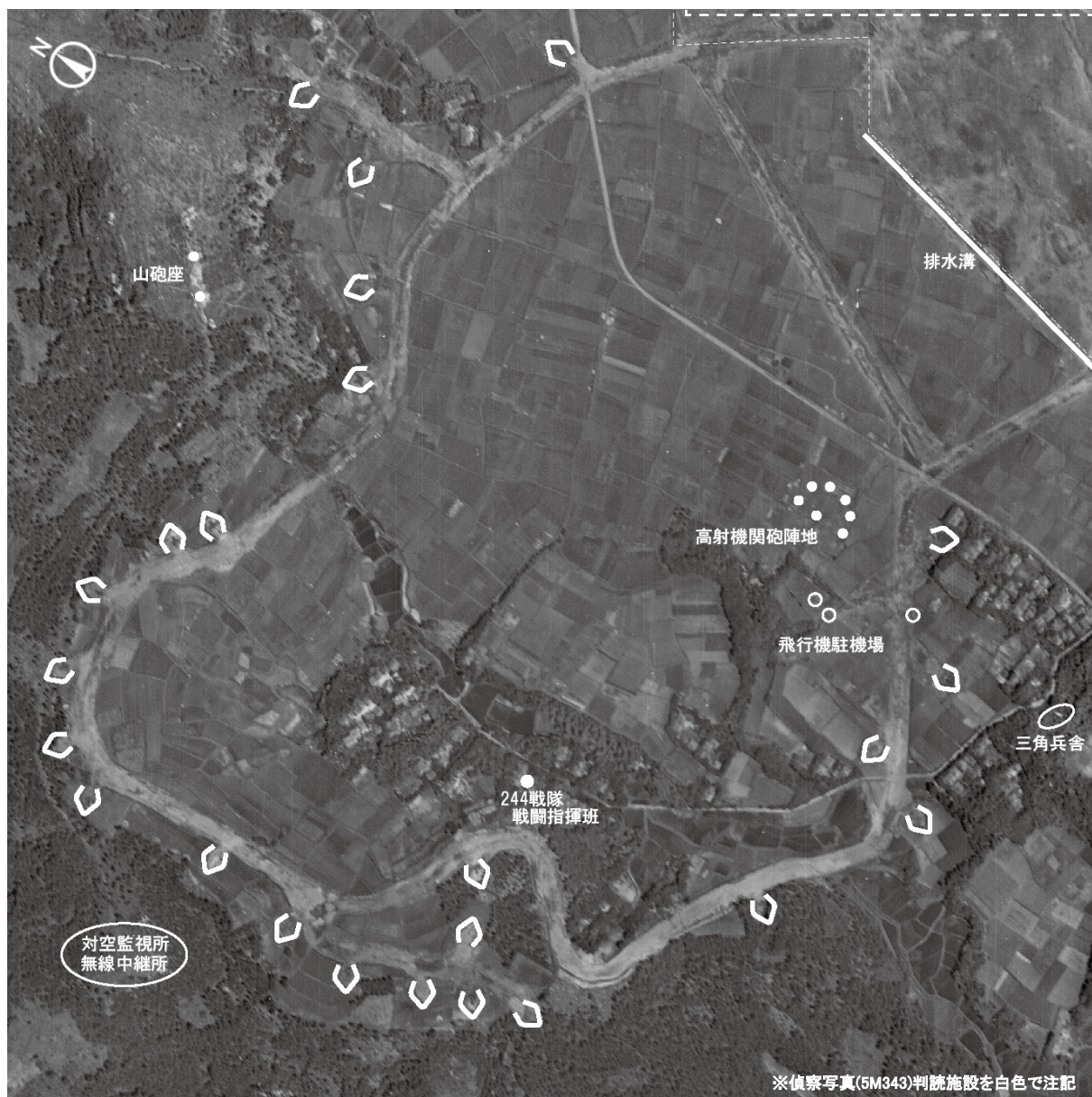
(2)－2「はと」掩体地区（堤之原周辺）



弁天山の麓に木製有蓋掩体が2箇所設けられているが飛行場施設から直線距離で約1.5km離れた場所になる。

さらに写真右上○で示した場所にも機影が確認できるが遠方のものは飛行場施設から直線距離で約2km離れている。ここまで機体を移動させる運搬路が必要となるが、周囲に家々が立ち並んでいることから既存の道を拡幅して誘導路として使用していたことが推測される。

(3)「かもめ」掩体地区



飛行場西に位置する「かもめ」掩体地区は主滑走帯西端から山の等高線に沿って誘導路が設けられ、その脇の山裾を馬蹄形に削って掩体としている。

掩体は24基築かれ、そのいくつかには格納されている飛行機の機影が確認できる。

「かもめ」掩体地区に築かれた誘導路の総延長は約3kmにも及び、峯苔集落を囲むようになっている。

空襲を受けるようになってからも当初は高射砲部隊が進出していなかったため近くで新兵教育を行っていた留守第6師団が応急的に猿山

に山砲座を設け、31式速射山砲で応戦した¹⁷⁾。

(4)「つばめ」掩体地区



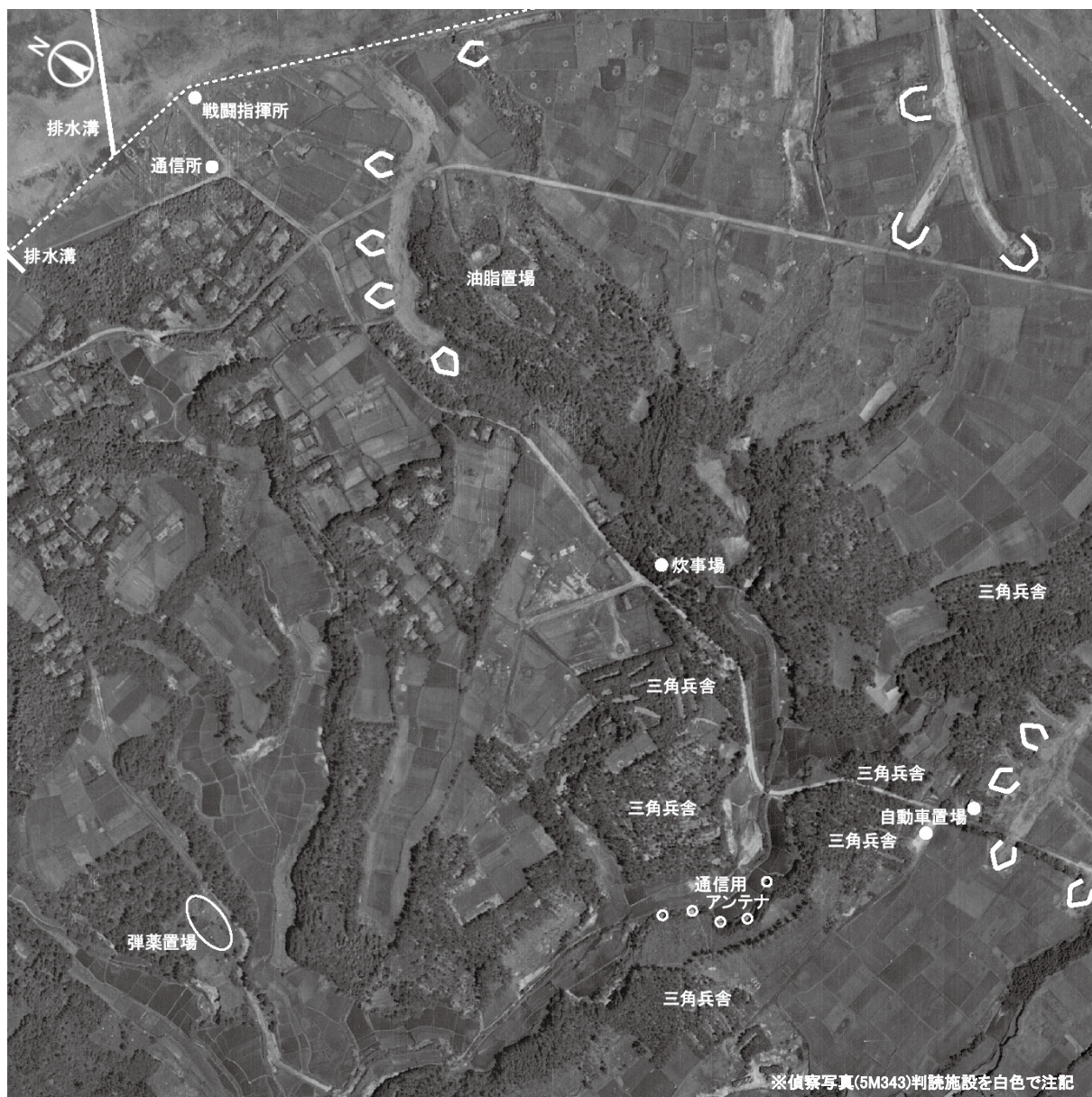
飛行場南の「つばめ」掩体地区は南北に延びる副滑走帯南端から誘導路が楕円を描く様に延びている。この場所は平坦であるので土を馬蹄型に盛って掩体を構築している。

写真左上方の掩体は飛行場から単線で誘導路が延び、その途中と終端部に2～3基設けられている。

写真右部は台地の縁となっているが、その段丘崖に壕が掘られ、特攻を指揮した攻撃集団の司令部と通信所が置かれていた。特攻作戦が終わった6月には本土決戦に備えるため、西に約2.5km離れた西之原の山中に移転した¹⁸⁾。

写真左下方、掩体からそれほど離れていない場所に三角兵舎があり、特攻隊及び掩護を担当した飛行戦隊員が宿泊した。

(5) 戦闘指揮所～三角兵舎地区



写真上方、戦闘指揮所は第6航空軍司令官、攻撃集団長が特攻隊員に対して訓示を行った場所である。そこから西へ約100mの場所にコンクリート製半地下式の通信所があり、福岡の第6航空軍司令部及び各地の飛行場と交信を行っていた。

通信所の東に誘導路があり4基の掩体がある。12月26日の写真では全て有蓋だが7月の時点では1箇所のみ有蓋で3箇所は無蓋となっている。

戦闘指揮所から南へ約1km離れた松林の中に三角兵舎が設けられていた。

飛行場の周囲には三角兵舎が何棟も建設されたが、この地区の規模が一番大きい。

(6) 三角兵舎地区



写真上方に兵舎地区への入り口があり、営門には大きな丸太が左右に立てられていた。営門を入った左に円形をした車のロータリーが確認でき、その先の山中に三角兵舎が建てられていた。

兵舎地区は大きく分けて北側と小川を挟んだ南側にあり、北側を司令部関係者、特攻隊員、報道関係者が使い、南側を特攻隊及び飛行戦隊員が使用した。北側の谷部には炊事場や浴場が設けられていた。

終戦後、日本軍が米軍に報告した知覧飛行場記録¹⁵⁾には「宿舎 三角兵舎35棟（収容力

1500名）アリタルモ爆弾ノ為全壊使用不能」、
「電燈線 兵舎地区ニ張線シアルモ銃爆撃ニ依り破壊箇所多シ」と記されている。この記述より、兵舎地区の規模と電力供給がされていたこと、そして、山中に秘匿して造られていたにも係わらず空襲を受けたことが読み取れる。

(7) 上郡 (役場周辺)



郡地区は東西に長く、武家屋敷のあった東側から現在も上郡、中郡、下郡と呼ばれている。

知覧飛行場から約2km離れた上郡には旧来、麓と呼ばれた武家集落があり、町の中心地となっていた。そのため、周囲には知覧町役場、警察署、税務署や郵便局など行政当局と教育施設が集まっていた。

写真左上の大きな施設は知覧国民学校及び知覧高等女学校である。なお、知覧高等女学校の3年生は1945年3月27日から4月18日まで知覧飛行場に動員されて三角兵舎地区で洗濯

や裁縫、兵舎の清掃などを行っている。

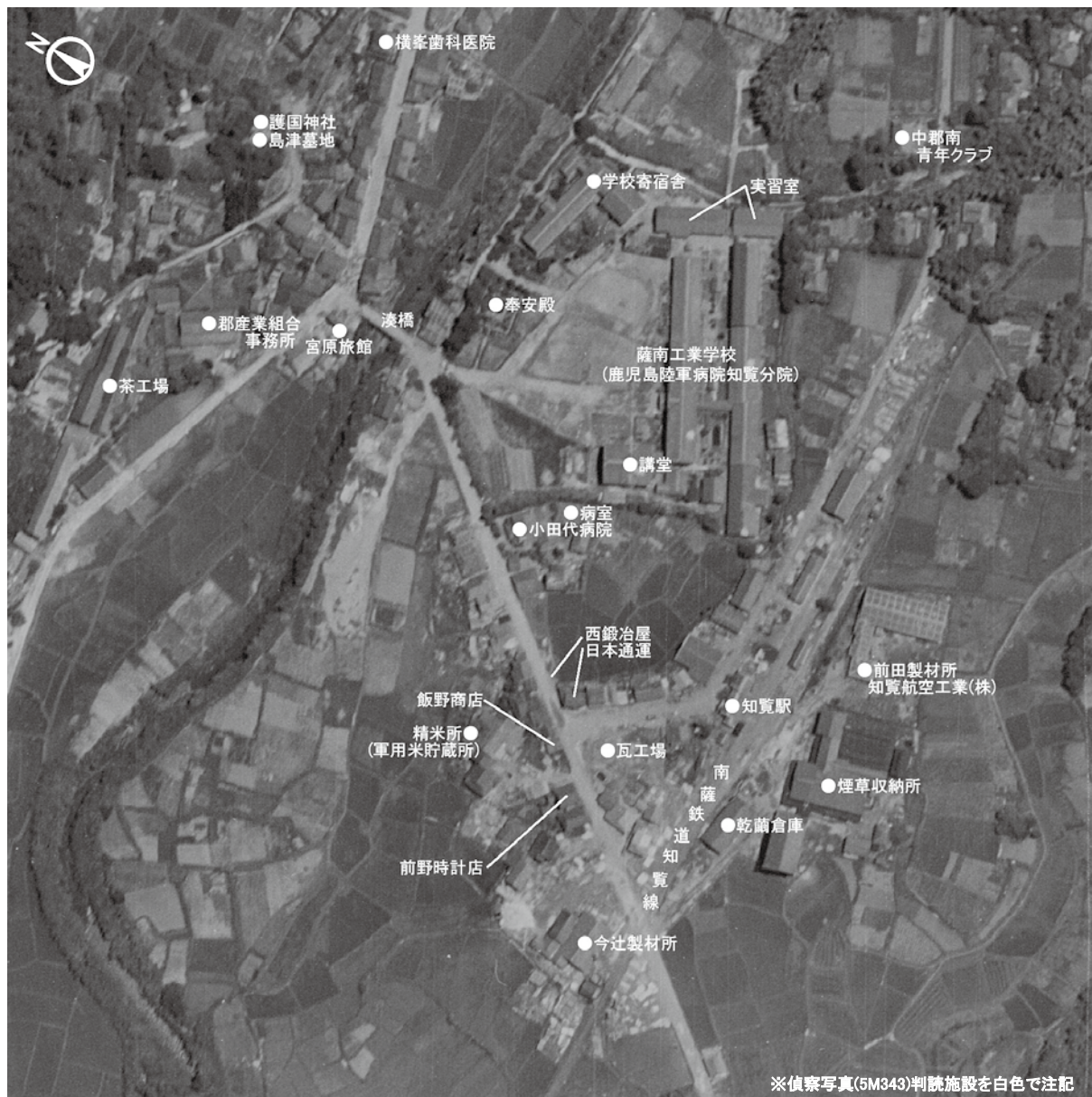
町内を流れる麓川に架かる永久橋を下方(西方)に進むと、永久旅館、内村旅館、富屋食堂が立ち並んでいた。

『知覧町郷土史』には上郡が空襲を受けたという記述はない。上郡は街の中心で家屋は密集しているが本写真においてもその痕跡は見られない。

(8) 上郡 (本町周辺)



(9) 中郡 (知覧駅周辺)



知覧飛行場と上郡との中間、飛行場から約1kmの場所に知覧駅があり、周囲には商工業施設が集まっていた。南薩鉄道知覧線は金峰町の阿多駅から延び、知覧駅が終着駅となっていた。

知覧駅の上(北)に見える大きな施設は薩南工業学校。1945年時点、生徒は各地での作業に動員されていたためほぼ不在となっており、校舎は鹿児島陸軍病院 知覧分院として使われていた。

知覧駅周辺は空襲を受けており、『知覧町郷土史』¹⁹⁾には7月3日の空襲の様子を「知

覧城跡、中尾原から厚村、薩南工業学校、小田代病院、西ヶ迫、大迫まで地上幅50メートルくらい、帯状に草も木も枯れてしまった。この時小田代病院は6個の爆弾を見舞われた。」と記されている。

5. 写真の撮影時期による考察

飛行場施設の変遷、度重なる空襲による被害の経過を記録した資料は今のところ見つからない。

しかし、飛行場の歴史を記録するうえで経過の検証は必要である。よって、米軍が撮影した偵察写真の中で日付が異なる時期に撮影された写真を使って考察を試みる。日付が判明している写真をもとに、同一場所を切り出し、時系列に並べて比較を行った。

使用した写真は次の通りである。

- ・ 1944年12月26日撮影 (MIPI-49594)
- ・ 1945年5月5日撮影 (21BC-5M-148)
- ・ 1945年7月27日撮影 (5M343)

比較により半年ほどの期間ではあるが施設の増設、空襲による被害状況の推移が確認できた。

今後はより多くの偵察写真を収集し、アクションレポートの記述とも照らし合わせれば、空襲による被害状況の推移がより明らかになると考えられる。

(1) 飛行場施設地区

12月の写真は空襲を受ける前の様子である。3月から始まった空襲により5月には木造格納庫は焼失し、鉄骨格納庫も屋根に被弾している。7月には鉄骨格納庫の屋根外板が無くなり骨組みだけの姿になっている。格納庫周辺の被害が激しいことから、米軍機は飛行場内で一番大きく目立つ存在だった格納庫を標的としていたことが推測できる。

「はと」掩体地区に延びる誘導路は12月の時点ではまだ見られず米軍の分析にも記されていないが5月の写真には写り、7月には飛行機が駐機している。



写真8 (1944年12月26日撮影)



写真9 (1945年5月5日撮影)



写真10 (1945年7月27日撮影)

(2) 戦闘指揮所地区

5月の写真では誘導路の脇に屋根のある有蓋型掩体が4基確認できる。しかし、7月では有蓋型掩体は1基のみとなり、他3基は土塁のみとなっている。

写真右部に見える林の中にある3棟の建物も7月の写真ではなくなっている。

この周囲は空襲で被災しているので焼失したか、被害を抑えるために取り壊したことが考えられる。『知覧町郷土史』²⁰⁾によると戦闘指揮所に隣接する取違集落は3月29日の空襲で全焼5戸、半焼3戸の被害を受けている。



写真11 (1945年5月5日撮影)



写真12 (1945年7月27日撮影)

(3) 高射砲陣地

飛行場防空の為、知覧には高射第131、132連隊、野戦高射砲第98大隊が展開した。

飛行場北端から約150mの大迫山に陣地が置かれ、5月の写真では円形の窪みを中心に半円を描くように土塁が6か所確認できる。中心が観測を行う指揮小隊の陣地、周囲が砲を設置した陣地。砲の数(6門)により1個中隊が配置に就いていたことがわかる。

5月5日、B-29が投下した爆弾が陣地内に落ち7名が戦死²¹⁾した。7月の写真上方には爆弾の炸裂痕と思われる円形の形跡が2か所確認できる。



写真13 (1945年5月5日撮影)

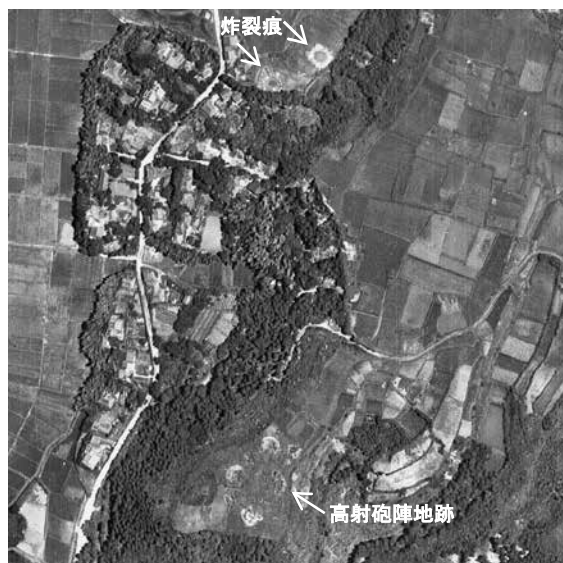


写真14 (1945年7月27日撮影)

6. 飛行機用掩体についての考察

知覧飛行場では、それぞれの掩体地区で飛行機の秘匿方法に違いがあることを米軍の写真から読み取ることができた。

1945年7月27日の写真で90基以上の掩体を確認できるが写真に映っていない東側にも誘導路が延びていたことから実際はこれ以上の掩体があったと推測できる。

形状による分類を行い、設けられた地区、その基数を示す。

(1) 露天型掩体

誘導路の両脇に飛行機を露天に駐機している。写真15で確認できた場所に矢印で示す。場所によっては周囲に樹木を植えて擬装を施しているものもある²²⁾。機影は確認できるが、竹や木材で作った囹機の可能性もある。「はと」掩体地区に38基確認できる。

(2) 木造有蓋型掩体

丘陵地を掘削して掩体を作り、その上に木造の屋根を設けている。

簡易的な格納庫として使われたと考えられる。

「はと」掩体地区に2基、戦闘指揮所の南側に1基（※5月5日の写真では4基）確認できる。

(3) 無蓋型掩体

無蓋型掩体には山の斜面を掘削して構築したものと、平地部に土塁を築いた2種がある。

山の斜面に造られたものは山の麓の緩やかな斜面を掘削し、掩体としている。飛行場の近くに丘陵地があったからこそできるもので、地形を有効に活用している。

平地部に構築されたものは土塁を築く一般的な掩体。土塁の形状は2種類あり、馬蹄形、多角形のものが築かれている。

「かもめ」掩体地区に24基、「つばめ」掩体地区に28基確認できる。



写真15 露天型掩体（「はと」掩体地区）



写真16 木造有蓋型掩体（「はと」掩体地区）



写真17 無蓋型掩体（斜面）（「かもめ」掩体地区）



写真18 無蓋型掩体（平地）（「つばめ」掩体地区）

知覧飛行場跡では考古学的な調査が行われ、掩体についても調査事例がある²³⁾ ²⁴⁾ ²⁵⁾ ²⁶⁾。

調査により「かもめ」掩体地区に残る無蓋型掩体の規模や構造が明らかになり、「つばめ」掩体地区では誘導路に付随する溝跡が検出されるなどの成果があがっている。

今後、知覧飛行場についての考古学的手法と、米軍資料などを元にした歴史学的手法とを合わせた研究が望まれる。

7. 課題

米軍の資料、先行研究の成果により知覧飛行場への偵察写真についてまとめたが残された課題も多い。

偵察写真に写っているものの把握だけでなく、日本軍の動向、作戦の推移が読みとれないか試みたい。例を示せば表2で示した偵察で米軍が把握した日本機の機数は、知覧飛行場に展開した飛行戦隊や前進してきた特攻隊とどれほど合致するのか、そして確認された機種はどの隊所属のものなのか検証する必要がある。

また、1944年12月から1945年7月の間に知覧飛行場は南方への中継基地、沖縄戦における特攻基地、本土決戦に備えた基地と大きく役割が変わっている。それに伴い、所在した部隊も大きく変わっている。飛行場の役割の変化、部隊の移動が写真から読み取れないか、関心を持つところである。

偵察写真（5M343）では、「はと」掩体地区に多くの飛行機が露天に駐機している。より安全な「かもめ」、「つばめ」掩体地区の掩体が空いているのになぜ、そこに入れなかったのか。写真を観察していて大きな疑問を持った。

理由があってそこに駐機していたはずだが、当時を知る人は極めて少なくなり聞き取り調査によって判明させることが限界にきて

いる。今後は収集できていない日の偵察写真の入手、空襲の際に撮られたガンカメラ映像の分析、空襲に関するアクションレポート（戦闘報告書）の記述に掩体地区の情報が含まれていないかその精査など、より米軍資料の分析に努めていきたいと考えている。

おわりに

本稿では、知覧飛行場の偵察任務の一覧をまとめ、偵察写真の使用例を示し、偵察写真（5M343）から判明した飛行場施設を紹介した。

また、撮影日の異なる写真を比較することにより空襲による被害の推移が確認できた。

知覧飛行場には90基以上、飛行機用の掩体及び駐機場を確認し、形態の違いが見られたので分類を試みた。

知覧飛行場は陸軍最大の特攻基地として多くの特攻隊員が出撃している。特攻機はどこに格納され、隊員たちは出撃までの僅かな日数をどこで過ごしたのか、特攻を歴史の史実として伝えていくには関連の場所を明らかにすることが必要である。

その主たる場所は飛行場だが、必ずしもその範囲だけに収まらない。

隊員たちは三角兵舎から出ていた軍用トラックで街に出て食事をとったり、住民と交流を持っている。旅館で親族と面会した隊員もいる。また、特攻隊員の郵便物の中には知覧局の消印が押されたものもある。

戦後75年以上が経過し、今と当時では町並みが大きく変わり、人々が当たり前知っていたことも世代が変われば分からなくなってしまう。

全てとはいかなかったが、主要な施設は写真上にプロットして記録に残せたので、当時の町並の情報が必要になった際に役立つものとする。

米軍偵察写真は当時の日本軍にとって国防

上撮られてはならないものであったが、こんにちにおいて活用の幅は広い。

空襲の前後に撮影していることから複数日写真が撮られており、偵察専用の部隊が専用のカメラを使用しているのもその解像度は高い。

郷土の歴史を記録するにも有効であり、そこにさらに情報を盛り込み精度を高めるのは現地に住み、調査に関わる者の責務と言える。

謝辞：飛行学校時代の施設名称を調べるにあたり、「知の飛南空会」には多大なるご協力をいただきました。三角兵舎地区の施設配置について「なでしこ会」のご協力をいただきました。

工藤 洋三氏からはF-5写真偵察機、5M343の作戦任務最終報告書の資料を提供していただき、執筆に当たりご助言をいただきました。記して謝意を表します。

注

- 1) 知覧町郷土史編纂委員会『知覧町郷土史』（知覧町1982）963頁
- 2) 昭和18年水路部発行、防衛庁防衛研修所戦史部 生田惇提供
- 3) 知覧特攻慰霊顕彰会『魂魄の記録』（2004）
- 4) 工藤 洋三『米軍の写真偵察と日本空襲』（自費出版、2011）
- 5) 工藤 洋三『沖縄を基地にした第28写真偵察戦隊の作戦』（第7回空襲・戦災・戦争遺跡を考える九州・山口地区交流会報告集、2021）
- 6) RG163(Record of the War Department General and Special Staffs)（米国国立公文書館）
- 7) RG341(Record of Headquarters United States Air Force)（米国国立公文書館）
- 8) Military Intelligence Photographic Interpretation（米国国立公文書館）
- 9) CINCPAC ADVANCE INTELLIGENCE CENTER『JAPANESE AIRFIELDS』
URL:<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/4009764>
（閲覧日：2021年1月15日）
- 10) MIPI-49594（米国国立公文書館）
- 11) 工藤 洋三『米軍の写真偵察と日本空襲』（自費出版、

- 2011）13頁
- 12) 迫田 雅人『知覧特攻基地空襲』（1997）
- 13) 2007年に（財）日本地図センターから偵察写真（5M343）を入手する際、米軍評定図の提供を受けた。
そこには次の記述があった。（関連箇所を抜粋）
ORGN&SORTIE 7AAF 28PR 5M 343(B3077)
DATE(D.M.Y) 22 JUL 45
PRERARED BY □□ GLEE,28 MAY 57
米軍標定図と最終報告書では撮影日に相違があるが、米軍標定図は1957年に新たに作られた旨の記述があるので、最終報告書の7月27日が撮影日と考えられる。
- 14) 知覧飛行場は1941年12月24日に大刀洗陸軍飛行学校の分校として開所した。飛行場北端に位置する施設群はその時に建設されたものである。1944年8月に飛行学校が閉校されると第40教育隊、大刀洗陸軍航空廠移動修理班（後の知覧分廠）が施設を使用した。1945年3月18日から攻撃の標的となって空襲を受け、施設の多くは焼失した。
- 15) 『飛行場記録 上別府・万世・知覧』（防衛研究所史料閲覧室蔵）
- 16) 知覧分廠に勤務した元軍人、元職員の親睦団体「知覧分廠友の会」からの聴取による。
- 17) 山砲座に配属された田岡 春一氏、福本 平氏より2004年に聴取。
- 18) 攻撃集団司令部の通信所と西之原司令部壕に勤務した飛田野 要策氏より2007年に聴取。
- 19) 知覧町郷土史編纂委員会『知覧町郷土史』（知覧町2002）1027頁
- 20) 同上 1025-1026頁
- 21) 同上 1026頁
- 22) 「はと」掩体地区の誘導路は弁天山の麓まで伸びているが途中、永里方面にも分岐している。その方の掩体は土が盛られ、植樹されたようになっている。
- 23) 上田 耕、坂元 恒太『南九州市埋蔵文化財発掘調査報告書(6) 知覧飛行場跡－三角兵舎跡・掩体壕・滑走路跡－』（南九州市教育委員会 2015）
- 24) 上田 耕、大山 勇作『南九州市埋蔵文化財発掘調査報告書（7）知覧飛行場跡（二）』（南九州市教育委員会 2016）
- 25) 福永 修一、有馬 孝一『鹿児島県埋蔵文化財センター発掘調査報告書（190）知覧飛行場跡』（鹿児島県立埋蔵文化財センター 2014）
- 26) 上田 耕、坂元 恒太、大山 勇作「知覧飛行場跡における戦跡考古学の現状と課題」『知覧特攻平和会館紀要第1号』（知覧特攻平和会館 2019）

（やまき・さとし 知覧特攻平和会館管理組合 学芸員）

【要約】

知覧特攻平和会館では2007年以来1945年7月に撮影された知覧飛行場の航空写真を用い、飛行場施設の把握に努めてきた。しかし、米軍の偵察任務など写真が撮られた背景の調査までは至っていなかった。

今回、2018年から取り組んでいる米国国立公文書館資料収集事業において知覧飛行場の偵察写真を用いた報告書があったことから米軍が撮影した偵察写真の分析が可能となった。

本稿では、知覧飛行場への偵察任務の実施状況の集約を行い、撮影した偵察写真を米軍はどのように使っていたのか活用例を示した。1945年7月の偵察写真を用い、戦争体験者からの証言をもとに、写真から判読した飛行場の施設を写真上に示した。また、撮影時期の異なる同一場所の写真と比較し、施設の増設や空襲被害の推移を考察した。航空機用掩体の分類と設けられた地区、その基数の集約を行った。

日本軍が記録した飛行場に関する資料が少ない中、米軍が撮影した偵察写真は戦時中の飛行場を検証できる有益な資料であることの一例を示した。

<Summary>

Mapping out features at the Chiran Airfield using U.S. military reconnaissance photos

Since 2007, the Chiran Peace Museum has used aerial photographs of the Chiran Airfield taken in July 1945 to learn as much as possible about the airfield facilities.

The reason why photographs such as the U.S. military reconnaissance mission were taken had not yet been investigated.

However, in the U.S. National Archives data collection project that we have been working on since 2018, we found a report that used reconnaissance photographs of the Chiran Airfield which then made it possible for us to determine their purpose.

In this paper, we summarize the U.S. military's reconnaissance mission plans to the Chiran Airfield and show examples of how the U.S. military used these photographs. Using information gleaned from this report, the reconnaissance photographs from July 1945, and from testimonies of war survivors, we were able to map out these features onto the photographs of the airfield. In addition, we compared photographs of the same location shot at different times and recorded how much the facilities expanded or how much damage the air raids caused. Classification of aircraft bunkers and aggregation of the districts and their base numbers were carried out.

While there is little material recorded by the Japanese military concerning its airfields, the reconnaissance photographs taken by the U.S. military show how they can be used to verify the location and use of airfields during the war.